

## 水産業のさかんな地域

奈良市立飛鳥小学校 池見 幸恵

### 1. 単元名 水産業のさかんな地域

### 2. 単元の目標

- ・ 我が国の水産業が国民の生活を支えていること、主な漁港、漁場の分布、水産業に従事している人々の工夫や努力、生産地と消費地を結ぶ運輸の働き、現在の問題点や今後に向けての取組などについて、様々な資料からの確に読み取ったりそれらを基にして考えたりして理解する。  
(社会的事象についての知識・技能)
- ・ 我が国の水産業の様子について調べたことを基に、我が国の水産業が国民の食料を確保するために重要な役割を果たしていること、自然環境と深い関わりをもって営まれていること、さらに今後の水産業のあり方などを考え、適切に表現する。  
(社会的事象についての思考・判断・表現)
- ・ 我が国の水産業の様子に関心をもち、意欲的に調べたり考えたりすることを通して、国民の食生活を支える我が国の水産業の発展を考えようとする。  
(社会的事象・学習への主体的な態度)

### 3. 単元について

#### ・教材について

本単元は、学習指導要領解説の内容(2)「我が国の農業や水産業について、次のことを調査したり地図や地球儀、資料などを活用したりして調べ、それらは国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深いかかわりをもって営まれていることを考えるようにする。」にあたる。「次のこと」とは「様々な食料生産が国民の食生活を支えていること、食料の中には外国から輸入しているものがあること」「我が国の主な食料生産の分布や土地利用の特色など」「食料生産に従事している人々の工夫や努力、生産地と消費地を結ぶ運輸などの働き」の3つを指している。

本単元では「なぜ、日本ではおいしい水産物をたくさん食べることができるのだろうか?」という学習問題を設定し、これを解決するために、日本の周りの海の特徴や地形、日本の水産業に従事している人々の工夫や努力、生産地と消費地を結ぶ輸送の働きを調べる。調べていく中で、水産業に携わる人々が、自然環境を生かすなど様々な工夫や努力をして生産したり、新鮮さを保ちながら輸送したりして国民の食生活を支えていることについて学んでいく。我が国は世界有数の水産国でありながら、漁場の変化や水産資源の減少、働く人の減少や高齢化、水産物の輸入量の増加などの問題を抱え、養殖業や栽培漁業が増えてきたことを理解する。そこからの水産業が持続可能な発展を遂げるためにはどうしていくべきかを考えることができる。

#### ・児童について

本学年では、授業中の発言も特定の児童に限られており、自分の考えに自信がもてず、

自分から発表することが少なかったり、周りを気にして発表できなかったりする児童が多い。そのため、発問をしっかりと聞き取って理解できているか確認するために、自分の考えをまずノートなどに記述してまとめさせたり、多くの児童が手を挙げられないときには、隣同士やグループで考えを交流したりするなどの手立てを行ってきた。

また、資料から読み取ったことを基に考え、発表することが苦手な児童が多い。「米作りのさかんな地域」の学習では、米作りの一年について様々な資料を使って学習した。米の生産を高めるために、農家の人が工夫や努力を日々積み重ねていることや、その背景には生産者の願いがあることは理解できたものの、そのおかげで自分たちが豊かな生活を送れていることには、まだまだ気が付いていない。このように資料を読み取り、考えを深めていく力の弱さが課題である。そこで、資料から考えられることや新たな疑問などを見出すことができる力をつけさせたいと考える。

### ・指導について

まず、「みつめる」段階で、和食について考える。和食には出汁が多く使われており出汁の多くが水産物である。そして、水産物が海のない奈良県にも多く届けられ、それ以外にも回転寿司の店が多くあるなど、水産業が自分たちの日々の暮らしを支えている産業であることに気付かせる。そこで、「なぜ、日本ではおいしい水産物をたくさん食べることができるのだろうか？」という学習問題を設定する。

次に、「しらべる」段階では、「沖合漁業は、どのように行われているのか。」「漁港に水あげされた魚は、どのようにして食卓へとどくのか。」「遠洋漁業は、どのように行われているのか。」「かつおが多く水あげされる焼津漁港は、どのようなところなのか。」「つくり育てる漁業は、どのようなものなのか。」を調べる。調べる際には、水産業に従事する人々の工夫や努力、その働きや現在の問題点、今後に向けての取組を重点的に調べまとめる。その際に、近畿大学農学部水産学科のゲストティーチャーに出会わせたり、様々な資料を提示したりすることで、児童が水産業を身近に捉えられるようにする。

そして、「ふかめる」段階では、それまでに得た具体的知識や既存の知識や経験を基に、「これからも水産物を食べ続けられるのだろうか？」というテーマで話し合う。その際に、なぜそう考えたのかを話し合わせるため、「食べ続けられる（食べ続けられない）と思います。なぜなら・・・だからです。」という話型を使用する。食べ続けられると考える児童は、日本の水産業に従事する人々の様々な工夫や努力を理由に、日本の水産業のよさを挙げるであろう。食べ続けられないと考える児童は、乱獲や環境破壊によって魚そのものが減っていることや、後継者不足など、日本の水産業が抱える問題点を挙げるであろう。そのよさと問題点を比較したり、関わりを考えたりすることにより、中心概念に迫ることができる<sup>【③多面的・総合的に考える力】</sup>と考える。

最後に、「ひろげる」段階では、どうすれば日本の水産業が持続可能なものになるかを考えさせる。輸入に関わる外国との関わり、後継者不足なども問題であるが、より自分事として考えさせたい。そこで、海の環境問題は海のない奈良県も無関係ではないことや、「サステナブル寿司」を例に自分たちも消費者であるという観点に立って消費行動を考え直すことの大切さを実感させることで、今後の日本の水産業に対し、自分も無関心ではいけないという思いをもたせたい。<sup>【⑥つながりを尊重する態度】</sup>

・「持続可能な社会を考える」視点について

本単元では、水産業が抱える様々な課題や将来に向けた努力を調べたり考えたりすることで、自分も消費者として関わっていることに気づき、水産業に関心をもつことにより、つながりを尊重する態度を養えると考えます。また、水産業は国民の食生活を支え、人々の生活と関わり合っていることを考えさせることができます。

[持続可能な社会づくりの構成概念]

- Ⅲ 有限性…水産物は資源であり、様々な要因によって食べられなくなることもある
- Ⅴ 連携性…環境保護や乱獲などの問題を解決するためには、自分たちも含めた世界各国との連携・協力が必要である

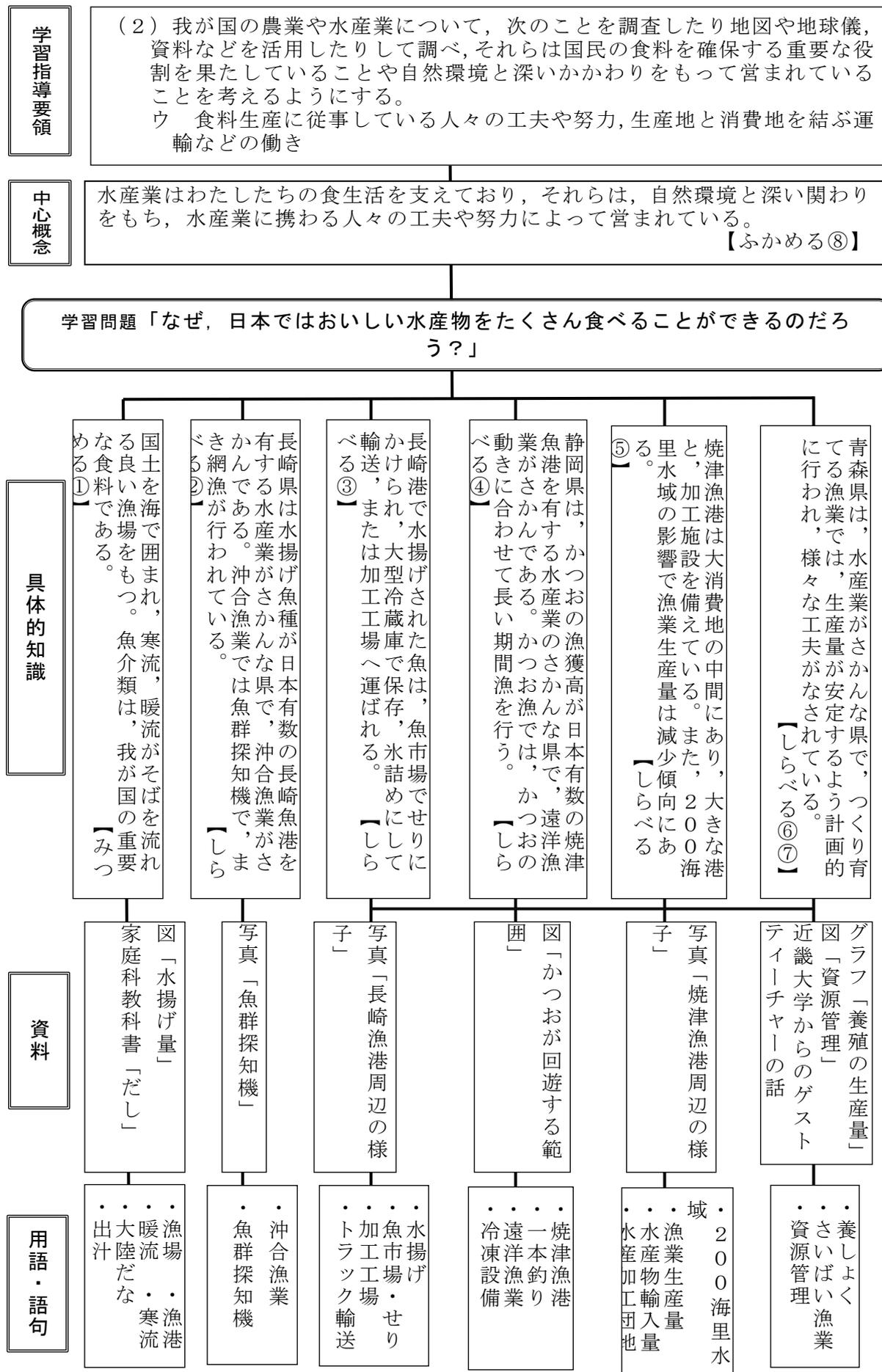
・評価について

評価については、単元を通して、毎回の振り返り、さらに自分がまとめたものによって評価していきたい。特に、日本の水産業の特色や課題をどのように捉えているかに注目し、児童が「我が国の水産業が国民の食料を確保するために重要な役割を果たし、自然環境と深い関わりをもって営まれていることを、どのように感じ取っているか」を見取ってほしい。「しらべる」段階では、毎時間の学習から「知識・技能」の観点から評価することができる。また、調べたことをまとめる過程や完成したまとめで、それまでの具体的知識がどれだけ習得できているか、また、「ふかめる」段階で中心概念に迫ることができたかどうかを、「思考・判断・表現」の観点から評価してほしい。

4. 単元の評価規準

ア 社会的事象についての 知識・技能	イ 社会的事象についての 思考・判断・表現	ウ 社会的事象・学習への 主体的な態度
<p>① 水産業が盛んな地域の事例として、我が国の水産業の様子について、地図や統計などの各種資料を活用して読み取っている。</p> <p>② 水産業に携わる人々が、自然環境を生かすなど様々な工夫や努力をして生産したり、新鮮さを保ちながら輸送したりして、国民の食生活を支えていることを理解している。</p> <p>③ 我が国は世界有数の水産国でありながら、漁場の変化や水産資源の減少などの問題を抱え、養殖業や栽培漁業、水産物の輸入が増えてきたことを理解している。</p>	<p>① 我が国の水産業の様子について水産業が盛んな代表的な地域の事例を調べるための、学習問題を考え表現している。</p> <p>② 水産業が国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや、自然環境と深いかかわりをもって営まれていることを考え、適切に表現している。</p> <p>③ これからの水産業のあり方について、自分たちの生活と関わらせながら具体的に考え、適切に表現している。</p>	<p>① 我が国の水産業の様子に関心をもち、水産業がさかんな地域の生産や活動について、意欲的に調べたり考えたりしている。</p> <p>② 国民の食生活を支える水産業の発展について、自分事として考えようとしている。</p>

## 5. 知識の構造図



※単元の構想（全9時間）

和食の出汁の正体は何だろう？

みつめる①

動物の骨や粉かな。

よく食べるけど分からない。

おいしいけど…。

和食に出汁が使われているんだね。

身近なところにたくさん水産物はあるんだな。

なぜ、日本ではおいしい水産物をたくさん食べることができるのだから

しらべる⑥

水産業について調べてみよう。

- ・沖合漁業は、どのように行われているのか。
- ・漁港に水あげされた魚は、どのようにして食卓へとどくのか。
- ・遠洋漁業は、どのように行われているのか。
- ・かつおが多く水あげされる焼津漁港は、どのようなところなのか。
- ・つくり育てる漁業には、どのようなものなのか。

毎日朝早くに出て行くんだな。大変だな。

たくさんの人のおかげで届くんだな。

近大マグロはつくり育てる漁業だな。

工夫がたくさんあるんだな。すごいな。

ふかめる①

これからも水産物を食べ続けられるのだろうか？

魚が少なくなっても養殖技術があるから食べ続けられる。

土地に合ったとり方を工夫しているから食べ続けられる。

漁師を継ぐ人が減ってきているから、いつか食べられなくなる。

海はつながっているし、たくさん食べる人が増えてきているから食べられなくなる。

ひろげる①

これからも水産物を食べ続けるためには、どうしたらいいのだろうか？

海が汚れないように、海のきれいにしたらいいと思う。

とりすぎないように、きまりを厳しくしていくべきだ。

漁師になる人を増やすために、魚を獲る人が豊かになるように考える。

わたしたちがきまりを変えたりするのは難しいなあ。

「森は海の恋人」  
「サステイナブル寿司」  
「水産エコラベル」

自分たちにもできることはあるんだな。

6. 指導計画（全9時間）

	毎時の課題と学習活動	●指導上の留意点 ・資料	評価（方法）
みつめる①	○どんな学習問題にすればよいだろう？① ・和食には出汁が多く使われており,出汁の多くが水産物であることに気付く。	●出汁を飲ませることで出汁のよさを確かめさせる。 ・出汁	イ① ウ① （発言・振り返り）
なぜ、日本ではおいしい水産物をたくさん食べることができるのだろうか？			
しらべる⑥	○日本の水産業は、どのようなものなのだろうか？ ・日本は国土を海で囲まれ、寒流、暖流がそばを流れ、良い漁場をもつことを調べる。② ・とる漁業はどのように行われているのかを調べる。③ ・漁港に水あげされた魚は、どのようにして食卓へ届くのかを調べる。④ ・つくり育てる漁業はどのように行われているのかを調べる。⑤ ・養殖業について調べたことをまとめる。⑥ ・日本の水産業についてまとめる。⑦	●地図や、統計などの各種資料を活用し確かめさせる。  ●水産業に従事する人々の工夫や努力、その働きや現在の問題点、今後に向けての取組を重点的に調べる。  ●近畿大学水産学科の先生をゲストティーチャーに招く。 ●つくり育てる漁業の功罪について明らかにさせる。	ア①②③ イ② ウ① （振り返り）
ふかめる①	○これから水産物を食べ続けられるのだろうか？ ・学習したことをもとに、課題に対する自分の考えをつくる。⑧ 【本時（1）】	●調べたことを根拠にして意見が交流できるように、自分の言葉で表現させる。	イ② （発言・振り返り）

ひろげる①	<p>○これからも水産物を食べ続けるためには、どうしたらいいのだろうか？⑨ 【本時 (2)】</p> <p>・魚を食べている者として、無関心ではいけないということに気付く。</p>	<p>●水産資源を守るためにいろいろな人が取り組んでいるということを知り、自分の身近なところにも取り組めることはあるということに気付かせる。</p> <p>・森は海の恋人</p> <p>・サスティナブル寿司</p> <p>・水産エコラベル</p>	<p>イ③</p> <p>ウ②</p> <p>(発言・振り返り)</p>
-------	--	---	--------------------------------------

<成果と課題>

この実践では、「ひろげる」の段階で、持続可能な水産業について考え、自分たちに出来ることはあるのかについて考えていくことが狙いであった。「ひろげる」の段階では、「これからも水産物を食べ続けるためには、どうしたらいいのだろうか？」ということを学級全体で話し合った。「ふかめる」段階でのテーマである「なぜ日本がおいしい水産物を食べ続けることが出来るのだろうか？」という問いから出てきた水産業の持つ課題に視点を当て、今後どうしていけば水産物を食べ続けることが出来るのかを考え、児童に意見を話させた。そこでは、水産資源の減少を改善するために、「若い人がもっと漁師をすればいい。」などの意見が出た。この段階では、海のない奈良県に住む児童が、自分たちが関わっていくというような自分ごとに置き換えた考えを出すことは難しいだろうと予想し、この「ひろげる」の段階で本当に児童に考えさせたいもうひとつの問いを用意した。「海のない奈良県に住む私たちにも出来ることはあるのだろうか」という問いを提示し、再度自分に近づけて考えさせた。児童からは「難しいのでは」という意見が出たので、「森は海の恋人」や「サスティナブル寿司」も資料を提示し、海の近くに住んでいなくても出来ることや、消費者として出来ることを資料を通して伝えた。そうすることで、海の近くに住んでいなくてもできる取組があると分かり、「それなら自分にも出来るかもしれない。」と考えられるようになった児童が多かった。

様々な取組を紹介することで、「海の話は海の近くに住んでいる人が解決する」のではなく、「海が近くになくとも私たちも何か出来ることがある。」と考える児童が増えた。また、児童の中には、「私はこれからも食べていきたいから出来ることからやっていくことが大事だと思う。」という考えを持つ児童もいて、はじめは働き手を増やすことを考えていたが、消費者として無関心ではいけないと感じている児童が多くいた。資料を提示することで、いままであまり考えてこなかった、海のない自分たちにできる関わりを示すことが出来たので、この実践を始めたころより、より自分事として考え水産物に関心を持ち続けようとする振り返りを書く児童の姿が見られた。

しかし、まだそこまで考えが到達していない児童もいた。要因としては、二つ考えられる。一つ目は、「しらべる」の段階で調べてきたことから、直接自分たちの食卓に届いている実感を与え切れていなかったことが考えられる。児童の振り返りから、日本の中の遠い場所で行われていることで、それが自分の食生活と関わっていることだという実感を得られていなかった児童がいたと感じた。二つ目は、「ふかめる」の段階で、話し合いの中で、水産業の抱える課題の切実さを感じられなかった児童がいたことだと考え

る。マグロのことだけでなく、サンマの漁獲量が下がっていることなども取り上げ、いろんな水産物が食べられなくなる可能性を持っていると示したが、児童にとってはまだまだ水産物をよく食べている実感の方が大きく、切実さに迫ることができなかったと感じる。自分ごとに置き換えるためには、今学習していることが、自分にも関わることだと実感させることが大切であり、そこが抑え切れなかったことに要因があると感じた。